

2.5 参考文献

参考文献の書き方には、専門によりそれぞれのルールがあると思われますが、 $\text{\TeX}$ では、次の 3 つの扱いがあります。

1. 文献のリストも引用番号付けも人間が行う方法
2. 文献リストは人間が作り、引用番号をコンピュータに付けさせる方法
3. 文献データベースに基づいて、すべてをコンピュータ化する方法

ここでは、2 番目の方法を紹介します⁵。

2.5.1 参考文献の作り方—半分人間が行う方法—

参考文献リストを人間側が作り、引用番号はコンピュータに付けさせる方法です。基本的には、図表などの参照で、ラベルを貼って番号を振っていったやり方に通じるものがありますので、わかりやすいとおもわれます。

文献リストは、例題 12-1 のような形で入力します。 $\text{\thebibliography}$ が参考文献の環境です。参考文献の一つ一つに、 $\text{\bibitem}\{...\}$ の形で、ラベルを貼っていきます。このラベルを文章中で参照し、番号を割り付ける処理を $\text{\TeX}$ 側が行います。

例題 12-1

(入力)

```
%\test12-1
```

```
\documentclass{jarticle}
```

```
\begin{document}
```

```
\begin{thebibliography}{9}← ここから参考文献のリストが始まる。
```

```
\bibitem{音心} ← リストの一つ目
```

厨川 守 他 (1978): “音質評価のための 7 属性”, 日本音響学会誌, 34 巻 9 号, pp493-500.

```
\bibitem{階層} ← リスト二つ目
```

上田 和夫 (1988): “音色の表現語に階層構造は存在するか”, 日本音響学会誌, 44 巻 2 号, pp102-107.

```
\bibitem{修論}← リスト三つ目
```

芝崎 朱美 (1994): 「言語音声の聴取印象を形成する母音の基本的特徴—健常音声と嗄声の比較—」, 大阪大学修士論文.

```
\bibitem{ピッチ}← リスト四つ目
```

芝崎 朱美, 宮本 健作 (1994): “ピッチ変動から見た言語音声の聴取印象”, 日本心理学会第 58 回大会発表論文集 pp560.

```
\bibitem{宮本}← リスト五つ目
```

宮本 健作 (1992): “話す—鳴管型人工喉頭による「語る喜び」の回復—”, 心理学評論, Vol. 35, No. 4, pp493-516.

⁵他の方法については、 $\text{\TeX}$ の解説書が数多く出版されていますので、そちらを参考にしてください。

`\bibitem{宮本 2}`← リスト六つ目

宮本 健作, 芝崎 朱美 (1993): “母音波形から見た風邪嚔声と喉頭癌嚔声の視覚的特徴”, 日本心理学会第 57 回大会発表論文集 pp273.

`\end{thebibliography}` ← 参考文献終わり

`\end{document}`

例題 12-1 で、`\begin{thebibliography}{9}`の`{9}`は、参考文献の番号の桁数をあらわしています。一桁の場合、`{9}`、二桁の場合`{99}`、三桁なら`{999}`となります。この数字は桁数を表すだけなので、他の数字でもかまいません。最終的な文献の数がわからないときには、`{9999}`としておきます。

2.5.2 参考文献の相互参照

文中での相互参照は、例題 12-2 のように入力します。

例題 12-2

(入力)

`%\test12-2`

`\documentclass{jarticle}`

`\begin{document}`

`\section{音声の印象評価とグルーピング}`

これまで、音楽心理学においては聴取印象に関する多くの研究が報告されてきた`\cite{音心}``\cite{階層}`。概して、聴取対象がクラシック音楽や楽器音などとしているために、人の話しことばの音声に対する評価語として必ずしも適切でないと思われることばも使われている傾向がある。それゆえ本研究では先行調査を行った結果、話しことば音声の印象表現にふさわしい語として、表`\ref{評価語}`に示すような形容詞を得た`\cite{修論}`。

これらの評価語を用いて、音声を聴取した際にどのような印象を抱くのかを具体的にしらべることを目的に聴取実験を試みた。

`\end{document}`

このようにしておけば、参考文献リストが途中で加除されても、順番が変わっても引用番号を気にすることはありません。`TeX`の方で自動的に番号を付けてくれるからです。

また、第 2.3.3 節 (21 ページ) でも同じでしたが、`\bibitem{...}`のなかに書き込むラベルは、大文字と小文字を区別します。さらに、コンパイルは最低 2 回行わないと、正しい参照ができません。

複数の参考文献を参照する場合、文中での相互参照は、例題 12-3 のようにラベルをカンマで区切ります。

例題 12-3

(入力)

`%\test12-3`

`\documentclass{jarticle}`